

## つくばね vol.26no.4

## 目次

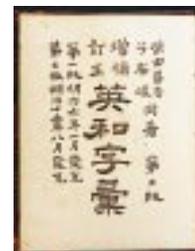
- 1 文科系研究者による電子図書館の構築
- 3 本学教官寄贈著書紹介 / 私の一冊
- 5 電子ジャーナルの利用に関するアンケート調査の結果について
- 7 図書館便利マップ
- 10 附属図書館開館日カレンダー
- 11 国立大学図書館協議会シンポジウム・  
関東地区国立大学附属図書館職員研修会
- 14 図書館実務研修を終えて
- 15 とびっくす / 掲示板

## 文科系研究者による電子図書館の構築

加藤 行夫

コンピュータの高性能化と急速な普及に伴い、全国・全世界の文献情報が次々と電子化されつつあるのは、とくにわれわれ文科系の研究者にとってありがたいことである。インターネットを通じて、居ながらにして国内外の貴重な資料や研究論文が閲覧できるメリットは計り知れない。しかし、言うまでもないことだが、これらのデータは、広く公共の利用に供するものとして、誰かがどこかで入力しなければならない。わが筑波大学も電子図書館の発展めざましいが、裏方では日々地道な作業が重ねられていることを知っていただきたく、ここにその一部を紹介したい。

平成8年度、当時の図書館長であった北原保雄教授（現学長）が代表となって、「人文科学・教育学文献の書誌情報および画像データベース」の名称のもと、文部省の科学研究費を申請、認可され、入力作業が開始された（実質的な采配は、当時の洋書データベース係長であった茅根邦子氏による）。この対象となった文献は、中央図書館の1階にある洋書と和書、つまり東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学が所蔵していた図書約20万冊である。このなかには、岡倉文庫（英語・英文学）を始め、乙竹文庫（教育学）、コムニウス文庫（教育学）、三宅文庫（歴史・考古学）



等，個人の収集になる特殊文庫や稀覯書も多く，その資料としての価値は他大学に類を見ない。

プロジェクトは，引き続き科研費の補助を受けて継続中（「写本・板本の書誌情報及び画像情報データベース」）で，現在，和本・漢籍の入力を残し，洋書の書誌情報に関してはデータ化が完了している。この部分こそ，すでにしてわれわれが多大な利益を得ているところで，これが成される前は，図書館利用者が「Tulips」で検索できる文献は昭和48年以降のものに限られており，それ以前のことを知りたければ旧態依然とした目録カードを繰るしかなかったのだ。それが一挙に探し当てることができるようになったのは大いに喜ばしいことだが，それにも増して，本学の充実した文献情報が国立情報学研究所（NII）の提供するNACSIS-CAT経由で，全国の研究者の幅広い要請に応えられるようになったのは誇ってよいことだろう。

こういった作業のなかから，われわれは，先に挙げた岡倉由三郎の個人蔵書のなかに江戸時代末期から明治・大正にかけて刊行された古辞書が多数含まれていることに注目し，「筑波大学図書館所蔵古辞書データベース作成」という企画を新たに立ち上げ，今年度の学内プロジェクト補助金が認められた。岡倉文庫が明治初期の英和辞典・和英辞典等，英学史の研究上欠かすことのできない資料の宝庫であることはつとに知られていたが，しかし，これらは余りに貴重であるがために管理・保存上の問題から日常的に手にとって見ることは難しかった。そこで，これらの古辞書を画像として電子的に入力し，ネットワークに載せて各自のコンピュータで活用できるようにするわけだが，それが実現すれば，辞書に関する研究のみならず，文学・語学の研究全般に多大な貢献ができるはずだ。

たとえば，俗に「近松の悲劇」のような言われ方がするが，これらの辞書を引けば，近松の同時代に日本語の概念として「悲劇」は存在せず，それが定着したのは比較的新しいという事実がすぐわかる。江戸末期，文久2年に刊行された『英

和對譯袖珍辞書』によれば，“Tragedy”の訳語は「哀歎ノ歌，ソノ芝居」となっており，続いて明治6年に柴田昌吉・小安峻同訳として刊行された『附音挿圖英和字彙』の同個所は「悲戯（ヒギ），凶事，慘酷（サンコク）ノ事」で，まだ「悲劇」ということばが現われない（ちなみに，この『附音挿圖英和』で“Comedy”は「滑稽戯（ダウケシバ斗）」）。それが，明治37年の Earnest Mason Satow & 石橋政方の An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language（3rd ed. Kelly & Walsh）では“higeki”，明治45年の入江祝衛『詳解英和辞典』で「悲劇」，とようやく現在の表記が見られるようになるわけだが，これらの辞書がすべて岡倉文庫に揃っているのだ。

諸外国にはデータベース化された古辞書がインターネット上で利用できる例はすでにあるが，わが国では日本語という入力上の壁があって古辞書に関してはデータベースの存在どころかまだ試みすらない。また，こういった辞書は，学問的価値は大きくとも，商用にならないため出版社等が手がける可能性は今後も皆無で，全国に先駆けてこれを筑波大学が始めることの意義は極めて大きい。

データベースの作成に際しては，ページ全体をそのまま画像処理し，辞書項目を索引として別途入力し，コンピュータのディスプレイ上で現代の辞書と同じように引けるようにする。まず最初に上記の『附音挿圖英和字彙』を試験的に入力するが，将来的に複数冊の辞典を同時に開いて画面上で容易に比較検討できるようにしたい。閲覧しているページの必要箇所を画面上の他の論文原稿等に貼り付けて引用することも容易になるはずだ。これらの活用法は研究者たちに実り多い成果をもたらすだろう。平成12年度単年で95万円という金額では構想のすべてを実現することはできないが，このプロジェクトが軌道にのれば，さらに補助金を申請して入力を継続してゆく予定である。

（かとう・ゆきお 文芸・言語学系教授）